

## 研究報告

秋田大学工学資源学部AO入試  
— 10年目に向けて —

坪井ひろみ\*\*

Admission Office-Managed Entrance Examinations  
in the Faculty of Engineering and Resource Science, Akita University  
— Toward its 10th Implementation —

Hiromi Tsuboi\*\*

## Abstract

Admission office-managed entrance examination (AO) was introduced to Japan in 1990. In 2003, after 13 years of its introduction, the Faculty of Engineering and Resource Science of Akita University also started the process. By the autumn of 2012, the 10th AO will have been implemented by the Faculty.

This paper first provides a general overview of the state of university entrance examinations in Japan. Then, it describes how AO has been implemented. Finally, it discusses the problems encountered by the Faculty in the process of implementing AO.

## 1. はじめに

秋田大学工学資源学部は、①少子化による受験生の減少、②受験競争の緩和により、明確な入学動機および目的を持ちあわせていない学生の増加、③大学独自のアドミッション・ポリシーに基づく多様な選抜方式に対する社会からの要請、の3点を背景に、平成12年5月25日に「学部AO入試等検討委員会」を発足し、3年間の審議を経て平成15年にAO入試を導入した<sup>(1)</sup>。

第1回目である平成16年度AO入試においては3学科が参加し、その4年後に当たる平成20年度入試では全8学科の参加を得たことにより、AO入試は工学資源学部における特徴のある入試として成長した。全8学科体制はそれ以降も継続されており、平成24年実施の平成25年度AO入試は導入後10年目を迎える。

本稿は、工学資源学部AO入試実施10年目に向けて、まず、本学部にAO入試が導入され今日に至る

までのわが国の大学入学状況を整理し、本学部AO入試がどのような状況下で実施されてきたかを概観する。次に、わが国のAO入試を概観しつつ、工学資源学部AO入試のこれまでの取り組み状況を述べる。最後に、工学資源学部AO入試における今後の課題を検討する。

## 2. わが国の大学入学状況

わが国は、第二次ベビーブーム世代（団塊ジュニア世代：昭和47～49年生まれ）の後に18歳人口が急速に減少し、少子化が加速している。表1および図1に示すように、高校卒業者は、平成4年3月の卒業者（平成3年度卒業者）が1,807,000人とピークに達し、それ以降は減少し続けている。直近の平成22年度卒業者は1,061,000人であり、ピーク時より75万人（40%）も減少している。高校進学率が現在ほど高くない昭和39年度高校卒業者数と比較してみても、10万人少ない。

一方、大学入学者数は、昭和40年度入学者数の25万人から平成14年度のピーク時に至るまで増加し続け、およそ2.5倍の609,000人となった。その後、減少に転じ、平成23年度には50万人となって

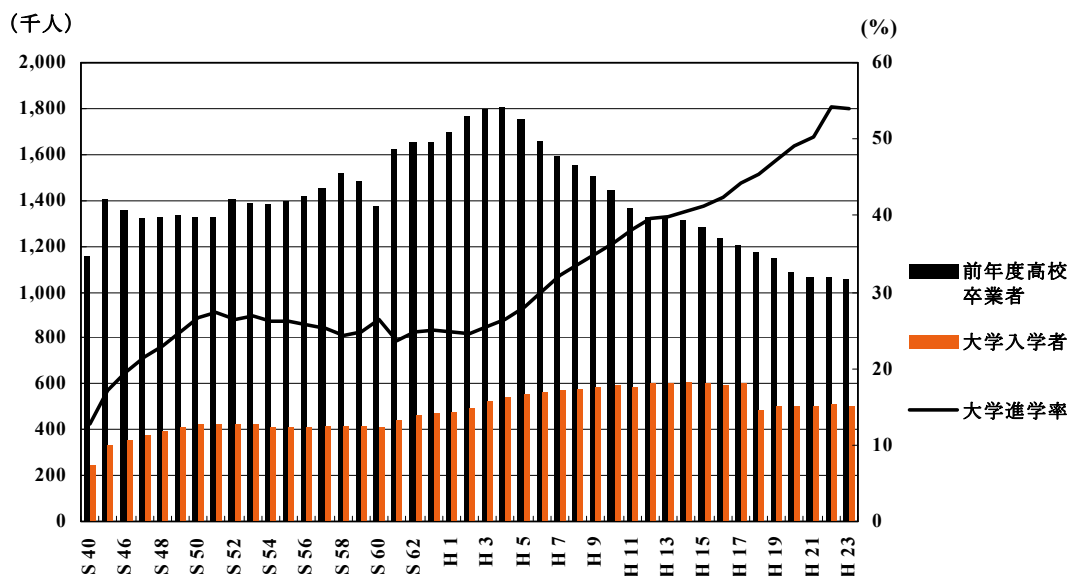
---

2012年7月2日受理

\*\*秋田大学大学院工学資源学研究科, Graduate School of Engineering and Resource Science, Akita University

表1 大学入学者と大学進学率の推移<sup>(2)～(10)</sup>

大学 入学年度	前年度 高校卒業者 (千人)	大学入学者 (千人)	大学進学率 (%)	大学 入学年度	前年度 高校卒業者 (千人)	大学入学者 (千人)	大学進学率 (%)
S 40	1,160	250	12.8	H 3	1,803	522	25.5
S 45	1,403	333	17.1	H 4	1,807	542	26.4
S 46	1,360	358	19.4	H 5	1,755	555	28.0
S 47	1,319	376	21.6	H 6	1,659	561	30.2
S 48	1,326	390	23.0	H 7	1,591	569	32.1
S 49	1,337	408	24.7	H 8	1,555	579	33.5
S 50	1,327	424	26.7	H 9	1,504	587	34.9
S 51	1,325	421	27.3	H 10	1,441	591	36.4
S 52	1,403	428	26.4	H 11	1,363	590	38.2
S 53	1,392	426	26.9	H 12	1,329	600	39.7
S 54	1,384	408	26.1	H 13	1,327	604	39.9
S 55	1,399	412	26.1	H 14	1,315	609	40.5
S 56	1,424	413	25.7	H 15	1,282	605	41.3
S 57	1,449	415	25.3	H 16	1,235	598	42.4
S 58	1,519	420	24.4	H 17	1,203	604	44.2
S 59	1,482	416	24.8	H 18	1,172	490	45.5
S 60	1,374	412	26.5	H 19	1,147	505	47.2
S 61	1,620	437	23.6	H 20	1,088	500	49.1
S 62	1,655	466	24.7	H 21	1,063	502	50.2
S 63	1,653	473	25.1	H 22	1,069	511	54.3
H 1	1,701	477	24.7	H 23	1,061	505	53.9
H 2	1,767	492	24.6				

図1 前年度高校卒業者に対する大学進学者，大学進学率の推移<sup>(2)～(10)</sup>

いる。

こうした現状（高校卒業生数および大学入学者数の減少）にあっても、大学進学率は昭和40年度の12.8%から堅調に上昇し、大学設置の緩和による後押しもあり、平成3年度からは一度も下降することなく上昇し続け、平成21年度にはついに50%を超えるに至った。高等教育におけるエリート段階から大衆化段階、そしてユニバーサル段階への移行はここに明らかとなった。

このユニバーサル段階に大きく貢献しているのは私立大学である。表2および図2に示したように、

大学全体の入学志願者延数を見ると、高校卒業生が減少し続けている状況下にあっても平成19年より再び漸増しており、このことは私立大学の貢献によるところが大きい。さらに、表2および図3からわかる志願倍率においても、私立大学は国公立大学より高く、7倍となっている。私立大学には、限られた数の国公立大学では対応しきれない社会の多様なニーズが反映されていると捉えることができるであろう。

表2 入学志願者数と志願倍率の推移<sup>(2)～(9), (11)～(15)</sup>

実施年度	国立大学		公立大学		私立大学		大学全体	
	入学志願者延数(人)	志願倍率	入学志願者延数(人)	志願倍率	入学志願者延数(人)	志願倍率	入学志願者延数(人)	志願倍率
H 12	471,281	4.8	137,225	6.6	2,800,102	6.8	3,408,608	6.4
H 13	462,541	4.8	139,614	6.4	2,859,436	6.8	3,461,591	6.4
H 14	468,907	4.8	145,815	6.6	3,038,423	7.2	3,653,145	6.7
H 15	468,140	4.8	151,431	6.8	3,143,622	7.4	3,763,193	6.9
H 16	448,038	4.6	139,936	6.2	3,050,799	7.2	3,638,773	6.7
H 17	423,929	4.4	137,621	5.8	2,995,676	7.0	3,557,226	6.5
H 18	425,001	4.4	138,279	5.6	2,930,710	6.7	3,493,987	6.3
H 19	413,870	4.3	135,143	5.4	3,021,217	6.8	3,570,230	6.3
H 20	411,476	4.3	137,463	5.4	3,058,646	6.9	3,607,585	6.4
H 21	398,255	4.1	147,332	5.6	3,103,684	7.0	3,649,271	6.4
H 22	407,616	4.2	156,151	5.7	3,179,848	7.1	3,743,615	6.6
H 23	416,681	4.3	157,611	5.7	3,220,309	7.2	3,794,601	6.6

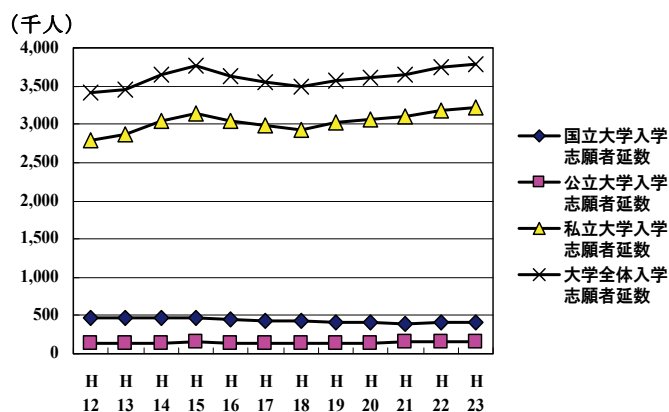


図2 国公立大学入学志願者延数<sup>(2)～(9), (11)～(15)</sup>

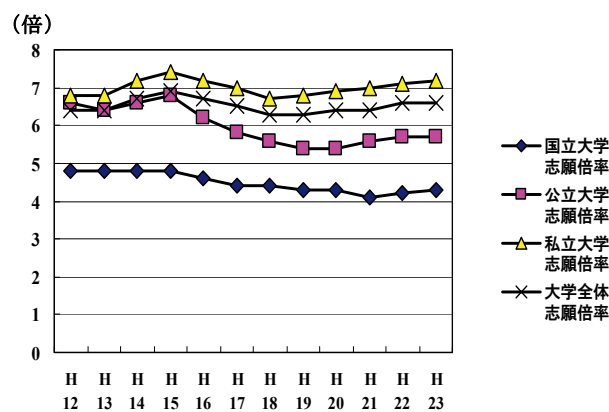


図3 国公立大学入学志願倍率<sup>(2)～(9), (11)</sup>

### 3. わが国のAO入試状況

わが国のAO入試は、平成2年度に慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスにおいて、新たな入試として初めて導入された。以降、AO入試という名称は国内において広く知られることとなるものの、アメリカで実施されているAO入試とは共通点が少なく、名称借用の感は否めない。

平成12年度において4つの国公立大学（東北大、筑波大、九州大、岩手県立大）がAO入試を実施したことによりAO入試はとりわけ注目を集め、AO入試実施大学は増加し続けている。表3および図4において明らかなように、平成23年度におけるAO入試実施状況は、国立大学では5校に3校、公立大学では3校に1校、私立大学においては5校に4校となった。但し、図5に示したように、AO入試入学者数の全体入学者数に占める割合は、国立大学が1%から2.7%へ、公立大学が0.2%から1.8%へ、そして私立大学が4.3%から10.4%へと上昇しているものの、全体から見るとそれほど高いとは言えない状況にある。実質倍率については、微減傾向にあると推察される（表3）。

国立大学におけるAO入試の先駆けである東北大学は、導入当初より学力重視のAO入試を掲げており<sup>(16)</sup>、九州大学においても学力は現在でもAO入試の前提となっている。平成13年度に導入した北海道大学でも、学業成績が良好であることおよび大学院に進学すること<sup>(17)</sup>を掲げているように、AO入試における学力は前提条件であり学力不問と捉えられていたわけではない。

しかしながら、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの選抜方法、すなわち「書類審査」および「面接」による選考、が唯一の手本として多くの大学に取り入れられ<sup>(16)</sup>、また、平成12年度における大学審議会も「AO入試には法令上の定義はなく、その具体的な内容は各大学の創意工夫にゆだねられており、一般的に言えば、アドミッション・オフィスなる機関が行う入試というよりは、学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適正や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細かな選抜方法として受け止められている<sup>(16)</sup>、<sup>(18)</sup>との見解を示した。こうして、AO入試は「学力不問」の「書類審査」および「面接」による選考と捉えられる傾向の強い入試となっていっ

た。文部科学省は、平成20年度文部科学省白書におい

て、「いわゆる大学全入時代を迎え、総じて大学入試の選抜機能が低下し、入試によって大学進学希望者の学力の水準を担保することが困難な状況になりつつある」との認識を示し、AO入試を「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接を組み合わせることによって、受験生の能力・適正や学修に対する意欲、目的意識等を総合的に判定する選抜方式」とした上で、「現在、アドミッション・オフィス入試や推薦入試は、受験者は一定の学力を有しているとの前提の下、必ずしも学力を課さない形態で普及しており、学力の担保を課題とする大学もある」との懸念を表明している<sup>(19)</sup>。

その後、対応策として、文部科学省は、平成23年度大学入学者選抜実施要項において、大学教育を受けるために必要な基礎学力の状況を把握するために、AO入試に関しては①各大学が実施する検査（筆記、実技、面接等）による検査の成績を合否判定に用いる、②大学入試センター試験の成績を出願要件（出願の目安）や合否判定に用いる、③資格・検定試験などの成績を出願要件（出願の目安）や合否判定に用いる、④高等学校の教科の評定平均値を出願要件（出願の目安）や合否判定に用いる、のうち少なくとも一つを行い、募集要項に明記すること<sup>(20)</sup>、と各大学に通知した。これにより、各大学は学力の把握に努めることとなった。

### 4. 工学資源学部のAO入試状況

冒頭で述べたように、工学資源学部は平成15年度において3学科にAO入試を導入した。国立大学に初めてAO入試が導入された年から3年後であった。平成19年度には全8学科に導入されており、募集人員は入学定員（460人）の6.5~7.4%である（表4）。

本学部のAO入試は、「学力」に偏ることなく、「個性」「意欲」「積極性」なども含めて総合的に合否を判定する入試と位置づけられている。AO入試の前に、1日を費やすスクーリングが実施されている。スクーリングは、スクーリングの受講生に学部をよく知ってもらうことを目的とし、大学で学ぶ基礎科目に関する講義・実験等を行っている。スクーリングの受講生は、その後、AO入試を受験すると決めた場合のみ出願する。試験では提出書類および口頭試問を含む丁寧な面接が実施されている。上述の平成23年度大学入学者選抜実施要項において通達された基礎学力の把握に関する4項目は、AO入試実施当初より、2項目目を除くすべてが取り入れられている。

表3 AO入試の推移<sup>(2)～(9), (11)～(15)</sup>

実施年度	国立大学					公立大学					私立大学				
	実施大学数	実施学部数	志願者数(人)	合格者数(人)	推計実質倍率	実施大学数	実施学部数	志願者数(人)	合格者数(人)	推計実質倍率	実施大学数	実施学部数	志願者数(人)	合格者数(人)	推計実質倍率
H 12	3	8	1,289	319	4.0	1	4	188	26	7.2	71	148	15,017	8,496	1.8
H 13	5	23	2,036	521	3.9	3	6	289	57	5.1	199	369	25,948	15,944	1.6
H 14	12	51	3,777	983	3.8	4	7	329	49	6.7	270	504	35,586	21,219	1.7
	(13%)	(13%)				(6%)	(4%)				(53%)	(39%)			
H 15	17	66	5,017	1,214	4.1	4	7	251	54	4.6	316	612	41,624	24,801	1.7
	(18%)	(17%)				(5%)	(4%)				(61%)	(46%)			
H 16	22	75	5,036	1,277	3.9	7	11	507	94	5.4	346	716	51,816	29,018	1.8
	(27%)	(19%)				(10%)	(7%)				(65%)	(52%)			
H 17	25	82	5,584	1,475	3.8	12	18	1,027	227	4.5	364	788	62,604	33,011	1.9
	(30%)	(21%)				(10%)	(12%)				(67%)	(56%)			
H 18	30	93	7,752	2,108	3.7	15	28	1,410	323	4.4	380	833	65,667	34,838	1.9
	(35%)	(24%)				(22%)	(18%)				(69%)	(57%)			
H 19	35	105	9,836	2,302	4.3	17	30	1,427	373	3.8	402	912	71,364	41,557	1.7
	(42%)	(28%)				(24%)	(19%)				(72%)	(61%)			
H 20	41	119	10,100	2,545	4.0	18	34	1,713	460	3.7	439	1,037	81,464	47,278	1.7
	(50%)	(32%)				(26%)	(22%)				(77%)	(67%)			
H 21	43	131	9,673	2,574	3.8	22	41	1,971	531	3.7	458	1,105	83,216	49,420	1.7
	(52%)	(33%)				(28%)	(23%)				(80%)	(70%)			
H 22	45	134	10,287	2,605	3.9	22	38	2,269	688	3.3	464	1,118	87,454	52,356	1.7
	(56%)	(36%)				(28%)	(21%)				(81%)	(70%)			
H 23	47	135	9,680	2,720	3.6	22	38	2,048	544	3.8	463	1,126	85,837	50,985	1.7
	(58%)	(36%)				(28%)	(22%)				(81%)	(70%)			

(注1) ( ) は大学数・学部数の全体数に対する割合である。

(注2) 志願者数と受験者数との差異は大きくはないとの前提の下で、志願者数と合格者数を用いて算出した倍率を筆者が推定実質倍率とした。

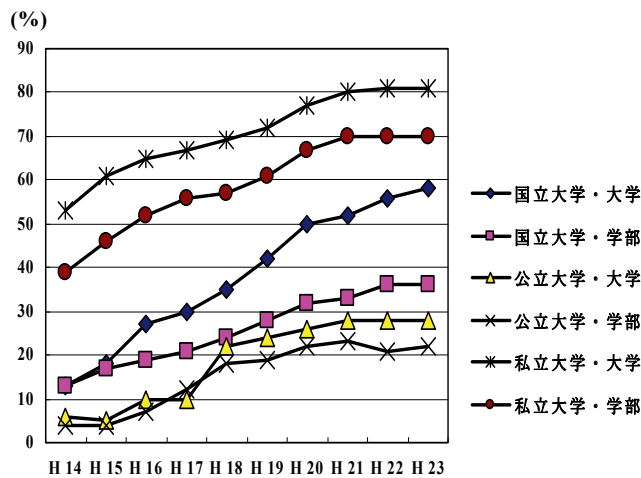


図4 AO入試実施大学数・学部数の全体数に占める割合<sup>(11)～(15)</sup>

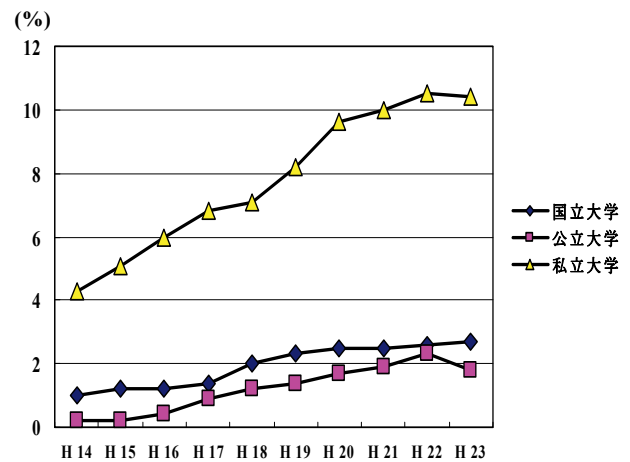


図5 AO入試入学者数の全体入学者数に占める割合<sup>(11)～(15)</sup>

表4 AO入試の募集定員の推移

実施 年度	(人)								
	H 15	H 16	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23
募集 学科	3	4	4	5	8	8	8	8	8
募集 定員	7	10	12	21	34	34	31	31	30
募集 定員 /入 学定 員	—	—	—	—	7.4 %	7.4 %	6.7 %	6.7 %	6.5 %

AO入試による入学者の学力について、文部科学省が白書において不足を懸念していることは、先に示した通りである。本学部では、入試区分別（AO、推薦Ⅰ、推薦Ⅱ、前期、後期）入学後の学力追跡調査において、AO入試による入学者がとりわけ学力不足であるという結果は、現時点では出ていない。

## 5. おわりに

AO入試を実施している全国の国公私立大学を対象としたアンケート（平成12～19年度）を分析した結果によれば、①大学ランクが下がれば下がるほど、小論文等の出題をしていないこと、②大学ランクが上位では、AO入試の開始当初から業務量負担への教員不満が大きかったこと、③大学ランクが中位の大学では、AO入試の開始当初のみ、個性的で意欲の高い学生を選抜できたこと、④その後、続々とAO入試に参加した中位から下位までの大学では、個性的で意欲の高い学生を選抜には全く該当しなかったこと、が明らかとなった<sup>(21)</sup>。

この分析結果を踏まえつつ、本学部におけるAO入試の課題を3つに整理し、以下に検討する。

- ・本学部のAO入試の特徴であるスクーリングは、時間を掛けて準備されており、教員の負担は大きいと思われる。今後は、学科毎に行っているスクーリングを複数の学科が共同で実施する可能性を検討する。

- ・本学部のAO入試における学力の把握は、主として教科の評定平均値および口頭試問により行われているものの、この方法のみで十分かを検討する。

- ・本学部のAO入試は、「学力」に偏ることなく、「個性」「意欲」「積極性」なども含めて総合的に合否を

判定する入試である。したがって、AO入試による入学者は単に学業成績をもって評価されるべきではなく、彼らの意欲、積極性などを評価対象とすることも重要な視点となる。そのための指標づくり（例えば、高い自主性と意欲が必要とされる卒業研究における指導教員による評価、大学院進学の実績などの多面的評価<sup>(22)</sup>）は喫緊の検討課題であろう。

今後、本学のAO入試に向けて、一層の努力が望まれる。

## 参考文献

- (1) 坪井ひろみ (2006) : AO入試実施状況に関する報告, 秋田大学工学資源学部研究報告, 第27号, 31-34頁.
- (2) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2001) : 大学入試フォーラム, No. 24.
- (3) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2002) : 大学入試フォーラム, No. 25.
- (4) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2003) : 大学入試フォーラム, No. 26.
- (5) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2005) : 大学入試フォーラム, No. 28.
- (6) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2006) : 大学入試フォーラム, No. 29.
- (7) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2007) : 大学入試フォーラム, No. 30.
- (8) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2008) : 大学入試フォーラム, No. 31.
- (9) 独立行政法人大学入試センター総務企画部情報課 (2009) : 大学入試フォーラム, No. 32.
- (10) 文部科学省 (2012) : 平成23年度学校基本調査報告書 (2012年2月14日), <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001011528>
- (11) 文部科学省 (2004) : 平成16年度国公私立大学入学者選抜実施状況の概要 (2012年2月10日), [http://wrap.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/16/10/04100604.htm](http://wrap.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100604.htm)
- (12) 文部科学省 (2006) : 平成18年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要 (2012年2月13日), [http://wrap.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/16/10/04100604.htm](http://wrap.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100604.htm)
- (13) 文部科学省 (2008) : 平成20年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要 (2012年

2月13日),

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/09/08092911.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/09/08092911.htm)

(14) 文部科学省(2010):平成22年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要(2012年2月13日),

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/22/10/1297952\\_1532.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/1297952_1532.html)

(15) 文部科学省(2011):平成23年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要(2012年2月13日),

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/23/10/1310780.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/10/1310780.htm)

(16) 倉元直樹・大津起夫(2011):追跡調査に基づく東北大学AO入試の評価,大学入試研究ジャーナル,第21号,39-48頁.

(17) 竹山幸作,山岸みどり,池田文人,鈴木誠,柴田洋,宮本淳,喜多村昇(2011):北海道大学のAO入試:10年間の推移と課題,大学入試研究ジャーナル,第21号,105-110頁.

(18) 文部科学省(2008):用語解説.

(19) 文部科学省(2009):平成20年度文部科学省白書(2012年2月16日),

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hekusho/html/hpaa200901/detail/1283630.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hekusho/html/hpaa200901/detail/1283630.htm)

(20) 文部科学省(2010):平成23年度大学入学者選抜実施要項(平成22年5月21日22文科高第206号文部科学副大臣通知).

(21) 木村拓也(2011):国公立大学AO入試における提出書類の傾向把握:モザイクプロットと多重対応分析を用いた検討,大学入試研究ジャーナル,第21号,171頁.

(22) 大久保貢,金澤悠介,倉元直樹(2011):福井大学AO入試入学生の意識と態度に見られる特徴について:平成21年度新入生アンケートに基づく調査研究(2),大学入試研究ジャーナル,第21号,141頁.